親和で29年～出会いに恵まれて～

山　根　耕　平

1．はじめに

29年といえば，長い！ようで，また，アッという間のような気もします。前半は主に児童教育学科で教員としての仕事，後半は主に大学の管理・運営の仕事で，29年。今回書かせていただくのは「児童教育学研究」という紀要。だから，学長や理事長としての話ではなく，教師としての思い出を中心に書かせていただこうと思います。

2．親和との縁

親和にはじめてきたのは，私が37歳のときでした。今から30年ほど前のことです。地図で確認し（まだ，ETC なんて想像すらできない時代です。），自家用車で有馬街道を神戸駅の方から，北に向かって進みました。どんどん山を登っていく感じで，一体，どこへ行くのか，少し不安になったのを覚えています。でも，そのとき，私は親和に採用していただく話で，そのお世話をいただく杉谷雅文教授の研究室を訪問するためだったのです。

それはさておき，話を１年前に戻さなければなりません。私は，当時，同志社の大学院博士課程（哲学及び哲学史専攻）を修了して，本務校はなく，同志社や神戸大学などの非常勤講師をしていたのです。

忘れもしません。非常勤の授業を終えて，同志社大学の寧静館の廊下を歩いていたとき，「運命の出会い」があったのです。「運命の出会い」，ほんとうにあったのです。廊下の向こうから，哲学の平石先生（M．ブーバーの研究で有名な方でした。）ともうお一人，小柄な方とが，歩いて来られました。近くなって会釈をしたのですが，平石先生が目が合うなり「彼が山根君で，先生の授業を受けたいと言っているんです！」とおっしゃったのです。一瞬何のことかわからず，思わず「ハイ」と答えていました。この短い会話から，私と親和との運命の「縁」が始まったのです。

そうです。その時の小柄な方が，「親和女子大学」（当時は神戸が親和の前についていませんでした。）教授の杉谷雅文先生だったのです。元広島大学教授で，教育哲学の分野では超有名な方でした。杉谷先生は同志社の大学院に招かれていたのですが，受講希望者がいなく，平石先生の突然の思いつきにより，私が受講希望者にさせられてしまったというわけです。この日から，杉谷先生との１対１の授業が１年間続くことになったのです。（当時はすべての科目が通年で４単位でした）結構，白熱の授業でした。厳しい基礎教育の必要性を強調される先生と極端な自由主義的な教育を主張する私の間で，議論が盛り上がったのです。若気のいたりというか，ずいぶん生意気な発言もし，今思えば，先生にずいぶんと失礼なことも言ったのではと，後悔

もしています。でも，それが却って，先生に率直な好印象を与えたのかもしれません。学期末が近くなったある日，先生がおっしゃったのです。「君，面白いよ。僕の辞めたあとに，雇ってあげるよ。」と！

これが親和の山根誕生の秘話なのです。といっても，3年間は，先生がまだ勤務されていたので，非常勤講師でした。担当科目は「幼児教育原理」です。幼児教育関係の業績も少しはあったのですが，自信はありませんでした。当時は余り業績を問わなかったのか，それとも，杉谷先生のお力だったのでしょうか。（後で聞いた話ですが，私の人事は，杉谷先生の独断で，それで決まったようです。）それから，非常勤講師としての授業，それも，授業ごとに準備をしていくという1年間が続きました。少し前置きの話が長くなりすぎたようです。とにかく，こういうわけで，私はめでたく3年後，「親和女子大学」の専任講師になったのです。この短い非常勤講師の間にも，もう1つの出会いがありました。その非常勤で教えたときの2年生の学生が，今，児童教育学科の教員をされている石岡由紀先生だったのです。ここにも，人の出会いの「縁」を感じます。

3．初めてのゼミ

無事，昭和60年4月，親和女子大学の専任講師になりました。そして，ゼミを持つことになりました。今と同じで，学生は3年になる前に，希望するゼミを決めるのです。学生に選んでもらえるか？不安もありました。非常勤講師として，2年生に「幼児教育原理」を教えていたので，若干，顔は覚えてもらっていたのですが，自信はありませんでした。

でも，元気でかわいい12名の学生が山根ゼミを選んでくれたのです。はじめてのゼミ生，顔も，そして性格も，29年経った今でも，覚えています。

さて，ゼミでは，「よく学べ，よく遊べ」のモットーのもとに，卒業論文の指導や美味しいものを食べることに，学生ともども頑張りました。優秀な学生ばかりで，とても楽しいゼミになりました。ゼミ旅行は，（あとで説明しますが，「縁」のあった）湯村温泉になりました。ゼミ生の就職のことですが，幼稚園や小学校や企業（銀行）へと就職していきました。そのころは，今のように，教員は学生に就職の世話はしなかったのです。とはいっても，幼稚園には2人世話できました。ゼミ生で思い出といえば，私のゼミから2人が，その後，縁あって，児童教育学科の合同研究室の職員になったのです。そのうちの一人は，今，教職課程・実習支援センターに勤務している平尾さんです。

さて，少し真面目な話をすると，その後，25年ぐらいゼミを持ちましたが，当時，私は小学校教育に関心をもっていて，積極的に各地の研究会や公開授業に参加しました。興味のある学生も連れて行きました。当時，静岡の安東小学校では上田薫（当時は都留文科大学の学長で，あの有名な哲学者西田幾多郎の孫でもある人です。）理論による授業，上田方式の授業が公開されており，5，6回，学生を引率して参加したのを覚えています。上田理論を卒業論文のテーマ

にする学生も結構いました。斎藤喜博の教授研究会の授業を参観するために，多くのゼミ生（当時は20名ぐらいのゼミ生でした。）を連れて，広島の呉に近い安芸郡の小学校まで何回か行ったこともあります。その小学校では，１年生から６年生まですべての生徒が音もなく（そんな感じなのです）跳び箱を軽く飛ぶのにびっくりしたものでした。当然，斎藤喜博について卒論を書く学生も出てきました。今，図書館にある「斎藤喜博全集」は，そのときに購入したものです。

真面目な話の裏に，つねに遊びがあるのが私の物語です。静岡では，参観日の次の日か，前日には，徳川家康の久能山を観光しました。広島では同様に，宮島の厳島神社を観光したことも，思い出です。何事も，オンとオフのバランスが大切ですよね。この伝統は，カナダの「海外教育実地研究」でも生きています。週末の「赤毛のアン」で有名なプリンスエドワード島訪問がその１つです。教員も学生も楽しく仕事と勉強ができる秘訣です。

４．初めての実習校訪問

私にとって教員としては親和がはじめての職場でした。それだけに親和は，私の人生においてかけがえのないものでした。とはいっても，最初の２年間は自由な教員生活を十分に堪能しました。スキーにテニスに野球に，そして，研究に。こんなに自由でいいのかな，と思ったものでした。年間，90日ぐらいしか大学に来なくてよかったのですから。（先生方が，今，こんなに忙しくなったのは，山根のせいだと思われていないことを祈っています！）

でも，恵まれた日はそんなに続きません。いや，それは私の性分に合いません。実習担当にしていただき，私の活動的な親和生活が始まりました。それも小学校と幼稚園の両方の担当にしていただきました。実習校・園の一覧表をワープロで作り，だれをどこにと，配当するのも楽しみでした。自分は，田舎が好きで，但馬地方を担当しました。今でも，実習訪問した学校とそこでの実習生の顔（名前は？）を良く覚えています。生野・和田山・養父・関宮・出石・豊岡・温泉町（今は新温泉町ですね）・香住の地域です。１日に３校の，研究授業を参観するときは，早朝に行って，前もって，学校間にかかる時間を（自動車で）確認していたものでした。今では想像できないぐらい「真摯」だったのです。（でも，ベテランになって，道に迷い時間に遅れて，実習生や幼稚園に迷惑をかけたことも自白しておきます。）岡山の津山方面にもよく行きました。（中国道の落合を降りて，南へ，そして山をどんどん上って，「山の上小学校」へ行った時のことはよく覚えています。全校20数名の学校で，訪問を終えて帰るとき，全校生徒が窓から手を振って見送ってくれたのです！から）不思議なことに，どの学校でどの科目の授業だったかが記憶に残っているのです。とくに，忘れられないのは，初めての実習訪問で行ったニューおじろスキー場の近くにある，美方町？の「奥八田小学校」です。すごい山の中の，いや，ここも山の上にある小学校でした。いよいよ研究授業です。私はといえば，授業後のコメントをどう言えばいいのか，授業中，そのことばかり考えていました。結局，「元気があってよかっ

た。」程度のコメントで終わりました。でも，校長先生（西村校長先生という名前も顔も覚えているのです！）に，こんな遠いところまで来ていただいたことに感謝され，おまけに，湯村温泉の「井筒屋」というホテルを紹介していただきました。こうして，「はじめてのお遣い」ならぬ，「はじめての実習校訪問」が楽しかったことで，以後，実習校訪問がやみつきになりました。（もちろん，「井筒屋」のホテル代は自分持ちですよ。その後の，ゼミ旅行が長い間，井筒屋だったのは，このときの校長先生との出会いがあったからです。）

実習に関連していうと，実習先でも，多くの出会いがありました。すべてをお話しすることができませんが，東高丸幼稚園に実習指導訪問でお会いした村上博子園長先生には，それ以来，懇意にしていただいただけでなく，定年後，本学にきていただき長く学生の教育にご尽力いただき，たくさんの学生を幼稚園の先生にまで育てていただきました。本学を定年後も客員教授として多大な貢献していただきました。村上先生には多くの教員も本学にご紹介いただきました。紙面をお借りして厚くお礼を申し上げます。

5．初めての海外：カナダ・トロント大学への留学

はじめに，ここは少し長くなることをお断りしておきます。私の人生のハイライトになり，大学の国際化の発端にもなった留学のことだからです。

本学（とくに児童教育学科）のカナダとの関係は，私が1992年９月から1993年８月まで，カナダ・トロント大学教育系大学院（Ontario Institute For Studies In Education, 以下，OISE といいます。）に，大学から在外学術研究員として留学させていただいたことを契機として始まりました。私の留学の目的はコールバーグ（故ハーバード大学教授）の道徳教育理論の研究にあり，ちょうど，その当時，コールバーグの共同研究者のＤ．ボイド博士が OISE におられたので，博士より留学を認められ指導を受けることになりました。研究室（今，本学に縁の深いベック先生やミラー先生も同じ階の研究室におられます。）は，トロント大学のスタジアムや高層ビルの立ち並ぶダウンタウンが一望できる８階のいい場所で，中国の東北師範大学の桂林先生と相部屋でした。（この「出会い」が，また，10年後，親和と東北師範大学の交流協定として実を結びました。）

カナダでの１年は，私にとって初めての海外生活，いろいろな面で，刺激が多いというよりも，毎日がカルチャーショックの連続でした。アパート探しからがもう大きな壁でした。トロント大学の学生課でアパート（日本で言うマンション）や一軒家を紹介してもらいましたが，それが市のどこらにあるのかも見当がつかず，決まらないまま，３週間のホテル住まいになりました。でも，親和学園の法人本部の課長さんから，困った時に訪ねなさいと名刺をいただいていたのが，「蝶理」という商社のカナダ支店の社長さんでした。結局，その社長さんの紹介で，大学から歩いて10分のところの Polo クラブⅡというりっぱなアパート（３LDK）の26階に住むことになりました。アパート（日本でいうマンション）は結構豪華で，守衛さんがいて，

1階にレストランやクリーニング屋さんもあり，3階にはトレーニング室もあり，前はスーパーで，すぐ西にはクインーズパークという公園（周囲1キロぐらいでランニングに最適）という絶好の場所でした。ただ，家具はなにもなく，ベッド，机，テレビと家具屋さんで買い，配達してもらいました。これが，たいへん。ひとりで組み立てるのがたいへんでした。説明書の通りやったはずでも，ビスが余り，机がグラグラして斜めになるんです！ベッドも大きいので組み立てるのがえらかったです！テレビは小さいものを買って，自分で持って帰りました。

さて，9月の第3週から授業の始まりです。最初の頃は，ボイド先生の道徳哲学の授業だけに出席しました。慣れるまでは好きなようにと言われましたが，ボイド先生の授業だけでも，「読んでおきなさい」という宿題の資料が毎週70ページもあるんですから。とにかく，斜め読み（英語でしたのははじめて！）です。そして，ポイントだけ日本語にして，発表に備えました。読みが当って，準備した答えがうまくいくことも多かったのです。そのとき，知りました。自分でピントがずれた答えだと分かっているのに，教授は，“Good Idea！”といってくれることです。人間，褒められるとうれしいもの，つぎはもっと予習をと思いました。さて，授業の方は，勧められて，クライブ・ベック教授（教育哲学が専門）の授業とミスゲルトという先生の授業を受けに行きました。このベック先生との出会いも，のちのち，親和に素晴らしいプレゼントをもたらすことになりました。

さて，トロントの1年間について話せば，紙面がいくらあっても足りませんので，今の「海外教育実地研究」と関連するお話をしましょう。

大学の授業は午後5時を過ぎて始まる，いわゆる夜間開講（学生に現職の教員が多いため）だったので，昼間，結構時間があったのです。朝から晩まで本を読んでいるわけにもいかず，思いついたのが，ベック先生の本を翻訳することと，トロント市内の小学校を訪問することだったのです。これも，急に思いついたわけではなく，11月に道徳教育の世界学会がOISEであり，学会の会長が指導教授のボイド先生であったこともあり，参加しました。この学会の前に，プレ行事として，トロントの小学校をいくつか訪問するというプログラムがあったのです。これが，結構，インパクトのあるものでした。当時，カナダの小学校では，「共同学習」（co-operative learning）が流行していました。一斉授業に慣れた私にはとても印象的でした。これが，きっかけになって，私の小学校詣でが始まったのです。学会で出会ったオタワ大学のベランジェー教授にもオタワに招かれ，オタワの小学校も訪問させていただきました。とても親切な先生で，その後もいろいろお世話になりました。（第1回の「海外教育実地研究」では，トロントの小学校訪問のあと，オタワの小学校を訪問しましたが，それもベランジェー先生のお世話でした。訪問した小学校は先生の奥様が校長をされている小学校で，カナダ1の小学校だということで，ほんとうに刺激的な学校でした。びっくりしたのは，教員と保護者が共同でカリキュラムをつくる，ということでした。当時の私は，これが多文化の国，カナダの真骨頂かなとも思ったものでした。）

さて，話をトロントでの小学校訪問に戻せば，道徳教育の学会以後，同室の桂林先生と市内のいくつかの小学校を訪問するのが，日課になりました。だんだん深みにはまり，ついには，いつかは親和の学生をカナダの小学校につれてくるぞ，との想いを強くしていました。これが，現在の「海外教育実地研究」誕生の「前物語」なのです。

さて，トロントでの1年間は，私個人にとって，人生の転機であり，またハイライトでもありました。世界を見る目も変わりました。人とのつながりもそれまでとは質が変わりました。カナダ留学以来，22年，親交が始まり続いている人たちの名前をあげます。カナダからの最初の招へい教授であるミラー先生と奥様のみどりさん，ミラー先生につづいて招へい教授で来学（震災の年で，三宮ではまだビルが倒れたままでした。）され，今も「海外教育実地研究」をアレンジしてくださるベック先生とその奥様のクレア先生，トロント大学附属小学校（JICS）の校長先生であるエリザベス校長とその夫でユニセフ・カナダ代表のデイビッドさん，日系3世でイズリントン小学校の教頭であるカミノ先生とその奥様で，かつてフィギアスケートカナダ代表のコーチをされていた（伊藤みどりと2回，大会で会ったそうです！）ギャビさん，そして，シュタイナー学校の前代表で本学にも招待したことのあるダイアナ先生，現在の代表であるウオーレン先生たちです。ほかにも，いつでも笑顔で私たちを歓迎してくれるJICSのキャロル先生，イズリントンのアイリーン校長，ライブラリアンのアンジェラ先生がおられます。忘れてはならないのは，トロントの日本人学校・補習校の校長をされていた鈴木先生です。留学中，その補習校をなんども訪問させていただき，後に始まった研修でも，当初，数年は学生が実習でお世話になりました。鈴木先生には，昨年，カナダに行ったとき，ホテルでお会いしましたが，とてもお元気で，20年前の話で盛り上がりました。同じ補習校のお手伝いをされていた杉本さんには，1昨年，学生たちとチャイナタウンを歩いているときに，「山根先生，山根先生」と声をかけられ，びっくりしたのを覚えています。（20年以上も前のことなのに私を覚えておられたことに感謝。）

ほかにも，滞在中からお世話になり，その後長く，交流のつづいた先生方もおられます。まずは，私の留学を受け入れていただいたボイド先生。2回，トロントから北へ300キロのところにあるコテージ（山小屋？別荘？）に週末に招いていただき，魚釣りを楽しみました。釣れる魚はパイクとブラックバスです。釣った魚を次の日は食しました！トイレも山に穴を掘ってするという原始的生活を3泊，それを2回です。地図もよく分からないのに，ホンダのシビックをレンタルして行きました。道はまっすぐな一本道。だれでも運転できます。左右を間違いさえしなければ。

また，トロント大学の教授で，カナダの日本語振興会の会長を長くされていた中島和子先生やその当時大学院生だった教え子の桶谷さん（今は西ミシガン大学の先生）や瀬谷さん（今は日本の東京のある大学の先生）。何人もの方が脳裏に浮かびます。中島先生には本学でも御講演をお願いしたことがあります。とても時間に厳しい方で，アポの時間の5分前に行っても，「ま

だお約束の時間ではありませんよね。」とくぎを刺されるのです。でも，私がどうしても会いたかったレーザー研究でノーベル賞を受賞されたトロント大学のジョン・ポランニー教授に会えるように配慮下さったのは，中島先生でした。私は同志社の研究仲間と一緒に，ジョン・ポランニー教授の父であるマイケル・ポランニーという化学者・哲学者の著書を翻訳していたからです。近年，良く使われるようになった「暗黙知」という言葉はマイケル・ポランニー哲学のキーワードになる専門用語です。このジョン・ポランニー教授の面会のとき，教授から日本の漫画「少年ジャンプ」をプレゼントされました。その中には「科学者偉人伝」のページ（漫画）があり，その主人公がポランニー教授だったのです。その後，ポランニー教授とはお会いする機会がありませんでしたが，今も毎年お世話になるエリザベス校長から，ポランニー先生はお孫さんを連れてよくエリザベスの小学校に来られていたそうです。「世の中，狭い」という話ですよね。

思い起こせば，ほんとうに多くの方にお世話になりました。多くの先生方や日本人の大学院生のお陰で，私は充実したカナダ生活を送ることができたのです。素晴らしい出会いが私の財産になりました。カナダの方々，感謝しています。ほんとうにありがとうございました。でも，また，「今後とも，大学のことをよろしくお願いします」とも言わなければなりません。

6．国際交流：「海外研修」のこと

カナダへの留学は，以後，大きな展開をみることになりました。帰国後，他の先生方と一緒に国際交流の必要性を説き，2年かかって，平成6年に国際交流委員会の立ち上げにまでこぎつけました。当時の学園本部長であった田村前理事長の後押しもあって，国際交流基金も設定され，目標は1億円でした。（結果的には約3000万円にとどまりましたが。）国際交流プログラムも委員会で活発に議論されました。

具体的には，山根がカナダ担当，赤石先生がイギリス・オーストラリア・アメリカ担当，山本先生がイタリア担当という役割分担でプログラムの企画・折衝を行いました。それが，カナダ（小学校・幼稚園）の「海外教育実地研究」，イギリス（オックスフォード大学）の「語学研修」，アメリカ（アーラム大学とウイルミントン大学）の1年間の留学プログラム，オーストラリア（シドニー大学）の「日本語教育実習」，イタリアの「海外芸術研修」として，それぞれスタートして現在に至っています。残念ながら，イギリスとアメリカは事情があって，現在は廃止されていますが，大きな足跡を残しています。

今，思えば，「継続は力なり」です。カナダは昨年で15回目，延べ，251名の学生が参加しています。イタリアは，12回目で，延べ，334名の学生が参加しています。オーストラリアは，11回目で，延べ，175名の学生が参加しています。イギリスのオックスフォード・ハートフォードカレッジでの6か月プログラムも人気で，多くの学生が，研修費が高いにもかかわらず，多くの学生が参加しました。

その後，韓国での日本語・文化研修，デンマークやスウェーデンの福祉研修，カナダ・トロント大学での語学研修，中国・上海体育学院でのスポーツ文化研修，オーストラリアでの「英語研修」（今年から），等が加わりました。今後は，さらにアメリカ，東アジアでの研修も検討されています。まさに，グローバル社会に対応する企画だと思います。これからも，学生が「世界をテキストに学ぶ」環境を強化していくべきだと思います。それこそ，校祖友國晴子先生の建学の理念を具現化することだと確信しています。

7．児童教育学科の発展：コース制のことと保育士課程設置のこと

私が所属した児童教育学科について少し述べさせていただきます。私が赴任したとき，定員は100名で，学生数は大体100名を少し超えているぐらいでした。（丙午のとき90名ぐらいでした）時には130名以上いた時もありましたが，教員数は10名ぐらいで，とても和気あいあいというか，家庭的な雰囲気のある学科で，大西先生という方が学科長（当時は主任でしたが）でした。大西先生は一家の主人然という方で，よく叱られました。「昔は，若い者はそんなに意見を言わなかったものだよ。」と。断わっておきますが，大学では，50歳台までは若い世代なんです！私自身。60歳を過ぎて，若手，若手と言っていたら，家で妻に「お父さん，いつまで若手なん？」と言われて・・・。さすがに今は残念ながら，若手意識はありません。

さて，当時，児童教育学科は，他の学科と同様に，３クラス構成で，クラス名はなんと「甲・乙・丙」でした。卒業要件単位は，一般教育36単位，専門科目88単位の計124単位です。すべて通年科目で，原則として４単位です。今のように２単位ではないので，ゆっくり勉強をしたり楽しんだりできました。反対に，少々は自由にできるゆとりもあり，お話ししたように，静岡や広島の小学校を学生と訪問できたのです。教務課の原簿も，すべて手書きのもので，１年の時に４年間で履修すべき科目が一覧になっており，学年が進むにつれ，履修された科目に評価が記入されるので，本当に分かり易いものでした。私の世代の先生にとって，これはなつかしいですよね。

児童教育学科において私が関わったことに，コース制の導入と保育士課程の申請と認可がありました。

学科のカリキュラムにコース制を導入することを提案しました。ただ，免許・資格をとることだけを目指して履修する，あるいは，興味関心のある科目を中心に履修する，悪い場合は，時間割を中心に科目を履修する，ということもありました。そこで

（１）初等教育コース

　①　幼児教育専修

　②　児童教育専修

（２）発達と教育コース

　①　心理学専修

② 教育学専修

（3）子ども学（学際的研究）コース

（4）生涯体育（スポーツ，健康学）コース

の4コースをつくりました。

コース制導入の意味は，興味関心や将来の進路等を勘案し，学習に流れをつくること，その中核に演習（ゼミ）を置くこと，その結果，学習が散漫にならず身につくというところにあります。たとえば，幼児教育コースには幼稚園教諭の免許状修得に必要な法定科目の他に，大学として，さらに幼稚園の先生として必要な科目を設けました。少し経ってからでしたが，4月の新学期当初の幼稚園を経験させようと，幼稚園観察実習という科目をつくり，幼稚園の実習だけで8単位（当時，法定は5単位）を設けました。その際，3年生になって選択するゼミも，幼児教育コースなら，幼児教育を専門とする教員担当の演習を開講しました。その最終の成果は卒業研究（論文）の完成という図式です。その後，時代とともにコースも変化し，現在のコースになっています。最初の趣旨は押さえておくべきポイントだと思います。

もう1つ思いだされるのは，児童教育学科に保育士養成課程を設置するときの話です。これは，児童教育学科の長年の夢でしたが，結構，苦労しました。ただ，夢とはいえ，児童教育学科の多くの先生方，ましては，大学当局には，そんな意識はありませんでした。私自身，幼児教育を研究していたし，友人にもその分野の人が多かったので，関心がそちらに向いたという偶然性もあったのです。あるいは，そうした偶然性に恵まれていたというのが，実情です。そういう環境のもと，当時，県内の大学のうち，4年制大学では武庫川女子大学だけが保育士課程をもっていました。

1999年のことだったと思います。私は当時児童教育学科の学科長をしており，保育士課程の設置のために，神戸市の保健福祉局を訪ねました。しかし，はじめ，神戸市の窓口の対応は，ほんとうに素っ気ないものでした。何度行っても，その理由は「神戸市では保育士は十分足りている」というものでした。私の方は，「保育士養成は一都市や地域の問題ではない」と主張しました。窓口で熱い議論を交わしましたが，行くたびに同じ議論の堂々巡りでした。こんなことで，1年は過ぎたと思います。

手立てを思案していた折，当時の学園の理事長であった小林先生にこの話をしていたとき，理事長が「私の遠い親戚が保健福祉局の局長をしているので，紹介してあげよう。」とおっしゃってくださったのです。小林理事長にご一緒していただき局長室を訪ねました。話はすぐ決着しました。局長さんは，窓口の担当者（私と議論を何回もしたあの・・・です。名前はもちろん覚えていますが。）を呼ばれ，「相談に乗ってあげなさい。保育士養成は単に神戸市だけの問題ではない。」との一言で，念願の保育士課程への申請への道が開かれることになったのです。ちなみに，そのときの局長さんが後の矢田神戸市長です。それ以後，矢田市長には，私が学長になったこともあり，神戸市の学長会議等でずっと懇意にしていただき，本学と神戸市の関係は

緊密になっていきました。（市長と言えば，一度，私の「道徳教育の研究」の授業に講師としてお招きしたこともあります。サッカー観戦を一緒にしているときに，「一度授業で話してもらえますか」とお願いしたところ，その場で秘書の方と相談され即決でした。授業では，幼児期の家庭教育の重要性を力説され，学生にとっても刺激のある授業になりました。）

保育士課程の申請には，まだまだ難問が控えていました。窓口が30年ほど申請をしたことがないというので，申請手続きがスムースに行かないのです。あれは９月だったと思いますが，申請の締め切りまで時間がないので，１週間で実習先の実習受け入れ承諾書を提出してくれと，突然，言われたのです。100名の実習受け入れ先ですよ。保育所も養護施設もあります。でもやるしかありません。神戸市の児童相談所におられた堤先生をはじめ，教職員が総動員で承諾書をもらいに駆け回りました。事務の平田さんも書類づくりに苦労されたことを覚えています。教職員，総動員での努力もあって，めでたく，半年後，厚生省から認可をいただきました。

2006年には福祉臨床学科にも保育士課程が認められましたが，これは保育士ニーズへの時代の動向が味方して，児童教育学科の申請に比べれば，スムースなものでした。ただ，同じ保育士養成課程を同じ大学で２つも開設するという点では，むずかしい課題もあり，申請書類の「設置の趣旨」のところで苦労しました。結果として，児童教育学科では，教育学の学習を基礎にした保育士養成を，福祉臨床学科では福祉学の学習を基礎とした保育士養成を行うというところで，すみ分けをして申請したのです。今では，児童教育学科の保育士定員130名，福祉臨床学科は40名。大学全体として170名の保育士養成を行っており，素晴らしい社会貢献になっていると思います。これが，保育士課程設置のストーリーです。

８．保育園開設のこと

保育士養成課程を認可され，保育士養成がスタートしたといえば，次は保育園の開設ということですよね。平成14年の１月８日のことだったと思います。（日まで覚えているのは，それだけインパクトがあったということだと思います。）神戸市から保育所設置の募集の通知書が届いたのです。みると，土地を無償貸与するので，保育所をつくらないかという設置者募集の通知書でした。当時の田村本部長（前理事長）に相談したら，「やったらどうですか」と即答をいただきました。（理事長には，こんな形で私は何回も助けていただきました。）

３月の申し込み締め切りまで時間がなく，今だから言えますが，ほんとうに「やっつけ仕事」でやりました。まず申請書類の作成が必要です。設置の趣旨と運営方針，保育方針・内容，建物の図面，そして，興味深かった本物の「預金通帳」等を揃える必要がありました。趣意書は，神戸市の無償貸与で同じように保育園を経営している友人に申請書の見本を見せていただいて，見よう見まねで作成しました。建物の図面は大学の工事でよくお世話になる会社に頼んで，作っていただきました。社会福祉法人の理事が必要になりますが，大学の福祉臨床学科の安藤先生と堤先生にご紹介いただき，2週間もかからないうちに，6名の理事と園長先生が決まりました。

園長先生については，同じように本学の児童教育学科の吉田先生（元神戸市立保育所所長）に紹介していただき，決まりました。

3月の審査はドキドキものでした。よく存じあげている福祉法人の園長先生も多くおられ，少し大丈夫か不安に思っていました。面接では，趣意書をもとにさまざまな質問・確認をされました。図面については，多くの質問や注意を受けました。

まもなく親和に決まったという通知をいただきました。

といっても，実はこれからがたいへんだったのです。友人の話では，建物の建築費用は7000万円ぐらいということだったのですが，実際は1億円を超えました。また，近隣の方を対象として保育園開設の説明会では，強硬な反対意見が続出。神戸市の方の説明にも「貸す耳持たず」という感じで，しんどい意見もありました。「保育園ができると土地の価格が下がる。」「静かな環境が壊れる。」「ドーム式にして子どもの声が聞こえないようにしてくれ」「えっ！」と思ったのは，「声のでない保育をしてくれ」とまで言われたことです。大学では毛利君（現，学生サービスセンター次長）が全面的に対応してくれましたが，一軒，一軒，訪問して理解を求めることもやってくれました。ほんとうにかれの「人間修養」になったはずです。いまも，保育園開設の功労者として感謝しています。こうして，難局を乗り越え，2003年4月，親和保育園は無事スタートしました。先生（保育士）の7割ぐらいは本学の卒業生を採用しました。親和には，今は，神戸市から民間委託による親和千鳥が丘保育園もあり，2つの保育園の仲間がいます。学生のみなさん，電話をすれば，いつでも受け入れてもらえると思います。ぜひ，訪ねてみてください。先輩たちがたくさんいますよ。

9．児童教育学科の未来

児童教育学科は，今，社会から高い評価を受けています。「先生になるなら　親和」と言われても，なんの違和感もないほど，この面での評価は定着してきています。何年も前から神戸市の教員採用試験（小学校）の合格者数はいつもトップクラスで，今年は兵庫県でも20名を超える学生が合格しています。今年の結果は，延べでいくと，小学校は最終的には60名を超える合格者数だそうです。一次試験では120名を超えていると聞いた時はびっくりしました。この成果の最大の要因は，なんといっても，学生のみなさんの頑張りです。そして，先生方のサポートのお陰です。その次には，学生の勉学を支える大学のシステム・組織も効果的なのだと思います。そして，もう1つ忘れてならないのは，学生が主体的に学び教員がサポートするという風土・文化が大学に醸成されている，ということです。私は，こうした風土・文化が大学教育に果たす役割・意義には，私たちが考える以上に，とても大きいものがあると思っているのです。

児童教育学科の将来を考える時，このような学びの風土・文化は大切に守り育ててほしいと思うし，それは，児童教育学科が発展するための要件だと思います。

児童教育学科の発展ということでは，もうひとつ要件が考えられます。それは，現在の大学

の教育戦略をさらに進化させることです。その戦略とは，学生の成長を促すための，学内でのいわゆる座学を意味する「オンキャンパス教育」と学外（海外も含めて）でのアクティブ・ラーニングを意味する「オフキャンパス教育」の融合という戦略です。ここでは，オンとオフの学習の相乗効果をねらいとしています。本学では，学生は多くの地域の学校でスクールサポーター等の活動ができるように，18の教育委員会や自治体と協定を，さらに22の保育園や幼稚園と協定を結んでいます。海外の研修プログラムも充実しています。とくに，カナダ，イタリア，韓国では教育関係の実習・見学が可能です。次年度からは，アメリカのカリフォルニア大学のバークレー校と協定を結び，当地の学校での教育実習プログラムを計画中です。そうしたオフキャンパスでの学びは，課題も明確になり，大学での座学のモティベイションを高める効果があり，さらには，その後の学習の質を高める，そういう効果を狙ったものです。

この本学のプログラムのねらいは，今，日本の大学や小学校で注目されている「反転授業」(Flipped Classroom）の応用ともいえるでしょう。「反転授業」について大雑把に説明すると，それは，自宅でパソコンやタブレット端末を使って動画で授業を見ておいて，学校では議論や実習をする，というものです。先に自分で授業を体験しているのですから，理解は深まると思います。

私は，先に，本学の戦略をさらに進化させる必要があると言いましたが，それは，海外のアクティブ・ラーニングを２段階構成にしようというものです。たとえば，トロントやイタリアでの教育実習プログラムを第１段階のプログラムとして，アメリカでのそれを第２段階のプログラムとし，その内容をアドバンストなものにするという戦略です。今の課題は，１回の海外研修を経て，それを踏まえて学内の学習を効果的にするということで完結して，学生のその後の成長を促す仕掛けがないということ，そして，その成果を評価する仕組みがない，ということです。プログラムに評価にもとづく連続性がないのです。評価システムをつくり，「学び続ける」システムを構築すること，それが課題です。たしかに，２度，海外研修に参加するというのは，経費の面での負担が大きくなるという問題が生じます。ここからは，大学の問題・課題です。どこまで学生の負担を軽減するために財政的助成ができるか，検討していく必要があります。学長と相談して経営会議等で前向きに取り組んでいきたいと思っています。

10. 終わりに

29年に及ぶ教員生活のハイライトのいくつかを長々とお話してきましたが，終わりに当たって，意を尽くすことはできませんが，この間に出会った学生のみなさん，そして先生方，本当にお世話になりありがとうございました。いろいろな場面で支えていただきました。学長であったときも，そうでした。今，理事長としての私にも，深い理解をもって協力支援していただいています。お陰さまで，恵まれた，ほんとうに幸せな教員生活を終えることができます。

そして，なにより素晴らしい学生・教え子に恵まれたことが，私の人生の宝物になりました。

ひょっとした縁で始まった親和での人生，海外も含め，多くの方に出会えたことも，私の人生をより深い，充実したものにしました。この29年の間に出会えた全ての方々に感謝して，そして，みなさまのご健勝とご活躍を祈念して，筆を置きます。

＜１＞主な学歴及び職歴

1977年３月：同志社大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程満期退学

1985年４月：親和女子大学専任講師

1988年４月：親和女子大学助教授

1992年９月：トロント大学大学院留学（1993年８月まで）

1996年４月：神戸親和女子大学教授

1999年４月：学校法人親和学園理事（現在まで）

2001年４月：神戸親和女子大学大学院文学研究科修士課程教授

2003年４月：神戸親和女子大学学長，大学院文学研究科長（2011年３月まで）

2010年４月：学校法人親和学園理事長（～現在）

この間，学生部長，国際交流委員会委員長，児童教育学科長，教務部長を歴任。

また，同志社大学，同志社女子大学，梅花女子大学，神戸大学，大阪教育大学等の非常勤講師を勤める。

2014年１月：神戸親和女子大学名誉学長の称号を授与される。

＜２＞主な研究業績

１．著書

①「自由な子どもの発見」（共著）ミネルヴァ書房，1983年

②「成長と交わり」（共著）晃洋書房，1985年

③「道徳教育の視点」（共著）晃洋書房，1990年

④「教育の原理」（共著）晃洋書房，1990年

⑤「現代教育原理」（共著）創森社，1995年

⑥「総合的学習の研究」（単著）ナカニシヤ出版，2001年

⑦「現代教育学のフロンティア」（共著）世界思想社，2003年

２．翻訳

①マイケル・ポラニー著「知と存在」（共訳）晃洋書房，1985年

②Ｄ．Ｅ．デントン編，Ｍ．グリーン著他「教育における実存主義と現象学」（共訳）晃洋書房，1989年

③Ｃ．ベック著「学校教育の未来」（単訳）晃洋書房，1995年

④Ｂ．スポディック著「乳幼児教育におかる遊び」（共訳）培風館，2009年

3．主な学術論文

①「ルソーにおける人間の研究」（同志社大学大学院修士課程哲学専攻修士論文）同志社大学教育学会誌「パイデイア第７・８号」1971年

②「モンテッソーリの教育哲学」関西教育学会紀要創刊号，1976年

③「ルソーにおける子どもの探求と発見」同志社哲学年報，1982年

④「モンテッソーリ教育の基礎理論（1)」親和女子大学「研究論叢」第20号　1986年

⑤「モンテッソーリ教育の基礎理論（2)」親和女子大学「児童教育学研究」第６号，1987年

⑥「モンテッソーリ教育の基礎理論（3)」同志社大学教育学会誌「パイデイヤ」第24号，1987年

⑦「道徳教育の動向と課題」同上「研究論叢」第21号，1988年

⑧「コールバーグにおける道徳性の発達と教育」同上「児童教育学研究」第７号　1988年

⑨「キルパトリックにおけるモンテッソーリ批判」同上第８号，1989年

⑩「生活科の基本的性格とその問題点」，同上第９号，1990年

⑪「生きていく力を育てる」兵庫県立子どもの館「研究論集」創刊号，1990年

⑫「子どものスポーツと遊び」，同上第10号，1991年

⑬「コールバーグにおける教育目的としての発達」，同上第11号，1992年

⑭「道徳教育への対話的アプローチ」同上第12号，1993年

⑮「道徳教育への「価値明確化理論」のアプローチ」，神戸親和女子大学「研究論叢」第28号，1995年

⑯「学校に求められるもの」同上「教育専攻科紀要」創刊号，1996年

⑰「コールバーグにおけるジレンマ・ディスカッション・アプローチ」同上，第30号　1996年

⑱「危機に立つ教員養成」，神戸親和女子大学「教育専攻科紀要」第３号，1998年

⑲「今，なぜ総合学習なのか」，同上「児童教育学研究」第18号，1999年

⑳「総合学習としての生活科の可能性」，同上「教育専攻科」第４号，1999年

㉑「総合的な学習の時間は道徳の時間か」同上「児童教育学研究」第19号，2000年

㉒「カナダの小学校・ICS における“knowledge building”アプローチと総合的学習」　同上「研究論叢」第34号，2001年

㉓「学びの共同体としての教室における“Moral Transactions”と教師の役割」，同上，「教育専攻科紀要」第６号，2001年

4．その他

①「交わりを育てる教育」，「現代教育科学」所収，明治図書，1985年

②「知的でオープンな道徳授業を」「道徳授業研究」明治図書所収，1992年

③「子どもの遊びとスポーツを考える」「そだちの科学」所収，日本評論社，2010年

＜３＞改組転換及び設置にかかる事業

①1992年　臨時定員増（３学科各100名→150名）の申請と認可。

②1994年　国際交流委員会設置（国際交流委員会委員長），国際交流基金の設置

③カナダ・トロントにおける海外研修科目「海外教育実地研究」開講

④1998年　人間科学科開設

⑤2000年　保育士課程開設（児童教育学科）

⑥2002年　大学院開設

⑦2003年　総合文化学科，心理臨床学科，福祉臨床学科開設

⑧2003年　親和保育園開設

⑨2004年　教育研究センター開設

⑩2005年　発達教育学部開設

⑪2006年　通信教育部開設

⑫2007年　千鳥が丘親和保育園開設

⑬2007年　三宮サテライトキャンパスセンタープラザ教室開設

⑭2007年　大学コンソーシアムひょうご神戸開設（発起人・理事校）

⑮2008年　子育て支援センター「すくすく」開設

⑯2008年　ジュニアスポーツ教育学科開設

その他上記期間における，国際交流及び地域貢献の活性化並びに国内外の教育機関との協定等に係る業績

①ソウル女子大学との協定締結

②東北師範大学との協定締結

③海外の幼稚園・小学校との協定締結（トロント大学附属小学校・幼稚園，ソウル女子大学付設ファラン初等学校）

④国際教育フォーラム開設

⑤各府県市の教育委員会との包括協定の締結

⑥神戸市北区との包括協定の締結

⑦私立幼稚園・保育園との協定関係の構築

⑧協定高校の設置

⑨通信教育部：大学との協定